

シリーズ学会紹介 その④

現代中国学会会務委員 木島 史雄

愛知大学現代中国学会は、学部創設にあわせ1997年に発足し、今年で14年目を迎える。講演会、シンポジウム、学会賞の授与など他の学内学会と同様の活動も行っているが、図書館との関わりからすれば、本学会の最大の特徴は雑誌『中国21』の発刊にあるということが出来る。

学内機関発行の雑誌といえば、通例は「紀要」というカテゴリーに入り、所属メンバーの論考や活動記録を掲載するものが主である。『中国21』はそれらと性格を殊にし、所属メンバー自身の論考よりも、部外者の執筆論文、研究ノート、インタビュー、座談などを主たるコンテンツとして、一般読者向けにひろく市販されている。今夏発行の最新号で33号、臨時増刊・中国語訳本なども併せて39冊を数える。本誌は研究論文集でもなく、出版社刊行の一般向け雑誌でもない。毎号、特定の特集テーマが設定され、学会メンバーである教員の見識に基づいてそのテーマを掘り下げるのに最適の執筆者が学内外はもとより、国外からも選ばれ、座談、インタビュー、論考などがくみ上げられる。学術雑誌や紀要に掲載される論文は、深く徹底した研究の成果として貴重なものではあるが、一般の読者には受け入れられにくい。いっぽう市販雑誌記事は、取っつきやすいという側面も持つが、内容が表面的であったり、性急な議論に陥ったものであったり、総合的な視野や発展性に欠くものであったりしがちである。それらの中であって本誌は、高い学術的水準を保ちながら、丁寧に問題を掘り下げ、一般の人々にもわかりやすい書物として高い評価を得ている。これは、学術研究の成果を社会へ提供することを重視するという現代中国学部の運営方針に沿うも

のである。テーマも表面に現れてきた問題だけでなく、中国を広く深く理解するのに不可欠な要素を時流におもねることなく着実に設定しており、後年の時局の先駆けとなるテーマ設定も少なくない。記事の型式も、一筋縄では行かない大問題を考察・解明するためにインタビューや座談などが交じえられ、考察導入にも役立つよう工夫されている。更に特筆すべきは、このような特集体制が36号まで積み上げられてきている点にある。学術大系の硬直化の中で抜け落ちてしまいがちなさまざまな問題点を取り上げる作業を積み重ねてきた結果、『中国21』をひとわり見渡すことで、中国に関わる隠された問題点の数々が浮き彫りとなり、さらにはその検討の糸口も得られるであろう。

さらに『中国21』が中国に関わる問題を時事的に取り上げるのに対し、それらを踏まえて包括的かつ系統的に現代中国のありさまを記述する書物として『ハンドブック現代中国』がある。この書物も2003年に初版刊行されて以来、三度の改訂を経て常に最新の情報を盛り込んだ現代中国事情入門書として定評を得ている。

学術研究の成果を社会へ提供することを重視するという現代中国学部の運営方針は、学部・学会活動の様々な場面で具現化されており、学会主催の講演会が基本的には学外者にも公開されて、多くの来場者を集めたり、エクステンションセンターでの連続講座の担当などにも見て取ることが出来る。笹島校地移転後は、教員、学生のみならず、社会とのつながりを更に深化・発展させ、本学部の特色を一層発揮させてゆくことになろう。